

令和3年度 奈良市立平城こども園 研究実践概要

園長名	森口 千鶴代
全園児数	121名

1、研究主題

「意欲をもって活動し、共に育ち合う子どもをめざして」
一心の動きに寄り添いながら

2、研究年度 初年度

3、研究主題設定理由

子どもが意欲をもって遊びにむかうには、遊びの中に心が動く要因があると考えた。保育者は子どもが心を動かす瞬間や心が動いている場面を捉え、一人一人の発達段階や性格、特性などを理解し適切な援助や環境構成をしていくことで、遊びや活動に意欲的な姿が現われるのではないかと考え、研究を進めていくことにした。

4、具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが保育者や友達と共に試行錯誤したり楽しんだりする姿の中のどのような場面で心を動かしているかを捉え、環境構成や援助の在り方を探る。

②研究の重点

- 一人一人の子どもの姿をしっかりと見つめ、心の動きに寄り添い内面を探っていく。
- 子どもが心を動かし、意欲的に活動できるように必要な環境構成や援助の在り方を探る。
- 共に認め合えるクラスづくりに努める。

③活動の方法

遊びの中で子どもが心を動かし、遊ぶ姿やその要因となるきっかけとなった場面を捉え、事例を挙げて職員間での話し合いの場をもち、研究を進めていった。

子どもの意欲的な姿	子どもの心が動いている様子	___	保育者の援助・環境構成
-----------	-------	---------------	-----	-------------

【事例1】 「ハートの形が欲しいな」 (3歳児 5月)

ねらい ○保育者に親しみを持ちながら、したい遊びを楽しむ。

<p>他児が粘土で型抜きを楽しむ姿を見てA児が保育者に「ハートの形がほしい」と伝えた。保育者がハートの形を作って渡すとニコニコした笑顔で受け取った。何度も「もう1つほしい」というA児に保育者はその都度ハートの形を作った。それをたくさん集めてお弁当箱に並べたり、積み上げて眺めたりすることを楽しんでた。保育者が「たくさん出来たね」「高</p>
--

くなってきたね」と声を掛けると、「もっと高くする」と嬉しそうに話す姿が見られた。保育者がA児のハートの形を作る姿に興味を持ち見ていた時に「したことがないから出来ないの」と呟いたので「一緒に作ってみようか」と声を掛けた。しかしA児は「出来ないから嫌」と保育者に話した。A児が経験のないことに不安を感じている姿を受け止め、実際に作りながら型を押す方法を伝え、粘土を薄く伸ばしたものを渡してみた。すると今まで型抜きを手にとろうとしなかったA児からやってみようとする姿が見られた。自分でハートの形を作ることが出来ると嬉しそうに「出来た」と保育者に知らせた。「もう1回（伸ばしたもの）作って」と何度も繰り返し型抜きを楽しんでいた。



(反省・評価)

・A児の「ハートの形がほしい」「もっと高くする」という思いを受け止め、何度もハートの形を作ったことで保育者に親しみを持ち、安心して自分なりの楽しみ方で遊ぶ姿が見られた。経験のないことに不安を感じているA児の姿から、実際にやって見せたり薄く伸ばした粘土を渡したりしたことでやってみようと思うきっかけになったと考える。

【事例2】 「線路は続くよ 給食室へ」 (4歳児 7月)

ねらい ○ 線路に見立てて自由にビニールテープを貼っていく。

○ 自分の思いを伝えたり友達の思いを聞いたりしながら一緒に遊ぶ。

昨年度は2クラスに分かれていたが今年度は1クラスへとクラス編成が変わったこともあり、1学期は前年度からの遊びなれた友達と遊ぶ子どもの姿が多かった。

体操教室で床に貼ったビニールテープをジャンプしたり歩いたりする活動をした。

普段もできるようにと廊下にビニールテープを数本貼っておいた。

ビニールテープに気付いた子ども達が、「何これ?」「あ!良いこと考えた!」と製作用ワゴンからビニールテープを持って来て廊下に貼り始めた。保育者は、ジャンプするなどして遊んでほしかったが面白そうなことが始まりそうだと感じ「何してるの?」尋ね見守ることにした。「線路みたいやから繋げてるねん。」「僕は緑!」「次は水色にしよう」と、好きな色を選びどんどん繋がってきた。廊下にビニールテープを貼ってカラフルな線路をつくっている友達の姿を見た普段関わりの少ない子ども達も加わり、「線路をつくる」という共通の思いをもって夢中で繋げていた。保育者が「この線路はどこまで続くの?」と尋ねると、保育室の隣の給食室をワクワクした様子で見つめて「給食室まで!」「そうやで!給食さんがこの線路を通して給食を運んでくれたら迷わないよ。」と話した。翌日、「やったあ!繋がった!!」子ども達が窓越しに見える給食調理員さんに「給食さあん!この線路通ってきてね。」と伝えると、調理員さんは笑顔で答えてくれ、子ども達はとても喜んでいました。



(反省・評価)

・保育者が前日の体操教室での活動を参考にして貼っておいたビニールテープであったが、線路づくりが始まった。保育者の思いとは違う遊びになっていったが、子どもの興味に柔軟に対応し見守ることにしたことで、友達と一緒に線路を繋げるという共通の思いをもって夢中になってビニールテープを貼っていく姿となった。「自分もやりたい」「給食室まで線路を繋げたい」

という思いをもって貼っている子、楽しそうだからもっとやってみようなど思いは様々ではあるが「線路をつくる」というワクワク心が動くような遊びは子ども同士の心を繋いだのではないかと考える。

【事例3】 「どうやったら転がるかな？」 (5歳児 11月)

ねらい ○いろいろな素材を使い、どんぐりが転がりやすいコースを試す。

○友達と一緒にドングリを転がすことを楽しむ。

B児が「壁も使ったらいいやん」と言った一言から壁を使ったコースづくりが始まった。B児「これをくっつけたら転がると思う」と言って縦半分に切った牛乳パックを上下に交互にして斜めに貼り付ける。ところが傾斜がきつく、ドングリを転がすと跳ねてコースアウトしてしまう。B児「飛んでった!」と思うようにならなかったため、不思議そうな顔をしながらもう一度転がす。しかし、ドングリはまたコースから飛び出してしまった。B児「うまく転がらへん」と言って追加の牛乳パックを持って来る。それを見たC児が素材置きをじっと見渡している。C児「これは?」と言って、筒を選び持って来る。B児も笑顔になり「すべりだいたい」と言って牛乳パックを減らして、筒を繋げて貼り付けていった。B児「きっとこれならいけるわ」と嬉しそうに一人でつぶやく。すると筒を通ったドングリが跳ねることなくコースを転がっていった。B児が保育者のもとに急いだ様子でやってきて「透明な筒ないの?透明な筒だったら中が見えるのに」とアイデアを出していたので、翌日透明な筒を用意した。B児が期待を込めた目で透明な筒を貼り付けた。しかし穴が小さめだったので、一度にドングリを入れると転がりにくく、詰まってしまった。「とれなくなった」と残念そうな声で筒をゆすり、それでもとれないので「一回外すわ」とあきらめたような顔で外し、床にトントンと筒を当ててドングリを出した。その様子を見ていたC児や新たに遊びに加わった子達が、「もっと斜めにつけたらいいんじゃない?」「どんぐりの大きさをコース分けしたらいいと思う」など、考えを出し合い、「じゃあこっちに大きいドングリのコースつくるわ」「(ドングリの) 大きさの絵を描いた紙を貼っておく」など、それぞれの考えを取り入れながら新たなコースづくりが進んでいった。



(反省・評価)

- ・様々な素材を用意することで、子ども達がこれなら転がりそうと心を動かされた素材を選ぶことができ、いろいろなコースを考えることが出来た。
- ・子ども同士のやり取りの中で、うまくいったり、いかなかったりする時に喜んだり、うまくいかず困ったりする感情や言葉が出ていたことで、それを一緒に遊ぶ子が気付いて一緒に考えたり次の展開に進めていったりすることができた。

【事例4】 「友達からの応援のすごさ」 (5歳児 2~3月)

ねらい ○同じ目的に向かって友達と励まし合ったり、協力し合ったりして進めようとする。

2月の参観に向けて、子ども達が自分の得意とする物や「これならできる」と思うものをみんなの前で披露することを楽しんでた。その中で縄を持っているが参加しようとしなないD児がいた。保育者が声をかけるが、下を向いて「やりたくない」と首を振って頑なに動こうとしなかった。しかし、数日後縄を持ったD児の姿が見られ、保育者との2人跳びに誘い掛けられた。保育者と友達がしている姿を見て、こちらに視線を向けるD児のやってみようとする表

情が見てとれたので「せーの」とかけ声をかけてやってみると、7回跳べ、保育者が回す縄と一緒に跳んでいる感覚を味わい、とても嬉しそうな顔をしていた。その翌日、縄を回そうとするD児がいた。数人の友達と保育者も傍で跳んでいると、D児がすばやく縄を回したことで1回跳ぶことができた。保育者が「Dくん！今1回跳べたよ！」の声で周りの友達が「すごいな！」と声をかけ、「できてた！？」とびっくりするような表情をしながらも嬉しくて続けて跳ぼうとする姿が見られた。その日の一斉活動時、縄跳びを披露する順番が来た時に、D児が縄を持って前に出ようか悩んで止まっている姿を見て、E児が迷わず立ち上がり「Dくん、がんばれ！いけるって！」とD児の傍に来て声をかけた。その声かけで何か決心したように頷いてD児が勇気を出して前に出た。いざ、跳んでみるとすばやく縄を回し2回跳べた。その様子を見たE児が手を叩きながら「すごいやん！Dくん！できてるで！」の声に周りの友達も一緒に応援し始めた。その声を聞いてD児がE児に視線を合わせて頷いた。そして力をもらったD児は続けて跳び始めた。この後、D児は園庭でも家庭でも自ら縄跳びに意欲的に向かう姿が増えた。

(反省・評価)

- ・出来なくても縄跳びがしたいという気持ちを大事にし、日々保育者が関わってきたことで一人一人のやってみようとする意欲に繋がっていったのではないかと思う。
- ・友達からの応援がこれほど勇気ややる気を生み、やってみようとする姿として現れたことに驚き、改めて友達に認めてもらう嬉しさの大きさを感じた。

5. 研究の成果

- 自分のことを受け入れてもらっているという安心感が子ども達の心の育ちの土台になっていた。また、保育の中のいろいろな場面で子どもが心を動かしている姿を、保育者が見逃さず捉えたり、願いをもって関わったりしてきたことで子どもの心が動き出し、今遊んでいる姿から一段、また一段と心が進みだし、意欲となって遊びや活動に向かう子どもの姿をとらえることができた。
- 各年齢の発達段階、個々の育ちによって心の動きは違った。また、その時の子どもの心の状態、友達や保育者の関わり方でも子どもの意欲の大きさによっても変わってくる。保育者は一人一人の心の動きを読みとり、共感したり寄り添ったり待ったりすることで、子どもは自分のすることを肯定的に見てもらえる体験を積み重ねやってみようとすることができた。
- 研究を進めていく中で、保育者の捉え方も様々であることが分かり多角的に子どもの姿を捉え内面を探っていくことの大切さを感じた。

6. 今後の課題

- 保育者が答えを早急に求めすぎてしまう傾向もあるので、各年齢の発達段階を踏まえて一人一人の心の動きへの寄り添い方を職員間で話し合っていく必要がある。
- 友達の様子を見て自分もやってみたいと感じたり、頑張っている友達を応援したいと思ったりする心の動きは、友達と育ち合う姿の始まりであると思う。更に意欲をもって活動し共に育ち合う子どもの育成を目指し、保育者の援助や環境構成はどのようにしていくか研究は続けていきたいと考える。